

## 「天離る鄙より」

— 外国における日本学研究的難しさと可能性についての私見 —

大阪市立大学名誉博士  
ハンブルク大学教授

ローラント・シュナイダー

ご臨席の皆様、万葉集の巻の第三には、柿本人麻呂の次の一首があります。

天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば……

また、巻の五には

天離る 鄙に五年<sup>いとせ</sup> 住まひつつ

とあり、この「天離る」は、皆様よくご存じの枕詞で、万葉集のはかたくさんの歌でも使われております。

本日の短いお話しが、皆様を驚かせたりしなければよいが、と思つてるところでございます。私は、万葉集についての講義のようなものを用意している訳ではございませんし、この枕詞の、係り方や語源など、まだ十分には解明されていないことについて、講演をするつもりでもございません。どうぞ御安心ください。

枕詞の「天離る」に关しましては、外に「天さがる」の形もありまして、万葉集では「天離る」の十六例に対して、「天さがる」のほうはただ一首にしか登場しません。それが、なぜ、日本の中世以

降では比率が反対になり、「天さがる」のほうが主流になっていくのかなど、それはそれで私として興味のないテーマではありませんが、そういうことについてここで何らかの推論を試みようというわけでもございません。

そうではありません。私が本日のささやかなお喋りの、言わばモットーとして、この枕詞を選びましたのは、私はかねがね、この短い「天離る」という枕詞が、この五つの音と、つぎにくる「鄙」という言葉との関係において、ドイツにおける日本学の状況、あるいは日本学研究者として私が置かれた立場といったものを、まさに、ズバリと言いついてるように感じているからなのです。

いったい、どのような意味でそのようなことが言えるのか、本日の私の話には——外国における日本学研究的難しさと可能性についての私見——という副題がついておりますが、このテーマについては順次お話しするなかで、あまり身構えずに、客観的事実に、あるいは主観的な評価や、時には、私自身の歩みを交えながら、そのこと

を明らかにしてみたいと思います。

では、可能性について話します前に、まず、ドイツをも含めた外国における日本学研究所の難しさについて考えてみます。

ただ、もう数年前のことになりますが、ここ大阪で「ドイツにおける日本学」という題でお話ししましたので、これを巡る諸問題につきましては、本日はごく簡単にまとめてお話しするにとどめます。

まず、第一に、ドイツの日本学は比較的若い学問分野であるということがあります。ドイツの日本学はまだ八十年と少し前のこと、一九一四年に日本学教授職がハンブルクに設けられて始まりました。ここの教授に招聘されたのは、それまで二十五年にわたり東京帝国大学の教授を務めていた人カール・フロレンツという学者でした。(芳賀矢一先生や久松潜一先生の文献学も含めて、日本の文献学もフロレンツ教授の影響を受けているといわれております。)

次に、ドイツの日本学研究はこぢんまりした学問であるといえます。戦前わずかに三つだった教授職は大幅に増えて今日ではドイツ全部合わせると二十大学に日本学がありますが、教授の数は約三十人で、これをいわゆるマス学科とくらべてみますと、決して多いとは申せませんし、日本の大学で、日本文学、国語、日本の文化を担当なさっている方の数に比べますと、霞んで見えなくなるほどの人数しかおりません。このことは単に数字の上の問題であるばかりでなく、研究内容ともかかわってきます。一つには、ドイツの日本研究者は自分の専門について語るべきパートナーが殆どいないということを意味します。もう一つには数が少ないので、一人ひとりの研

究者は、いきおいそのカバーする領域が広がってしまっています。少なくとも、教師としてはそうせざるを得ません。日本の国文学者の方を時々うらやましく思うのはこういう面で、一生を通じて一人の作家を研究するとか、何十年も一つの作品の研究をしておられるかたもありますが、私たちのように、研究者の数が少ないと、おのずと、いろいろの時代に向かわざるをえないのでありまして、或るときは中世、或るときは近世、という具合で、故郷のない旅人のように、感ずることもあります。

第三に、日本が遠いということがあります。たとえば、学術研究プロジェクトをやっていると日常的に持ち上がる問題で、日本がとどき、絶望的にまで遠いと感じられることがあります。つまりドイツの日本研究には資料が少なすぎることです。もちろん、ミュンヘンのババリア州立図書館とか、ベルリンの国立プロシャ図書館とか近代以前の作品も含めて、夥しい数の文献資料を集めている図書館もあります。しかしながら、ほんのしばしでも、例えば平家物語について考えていただければ、お解りになるとおり延慶本、八坂本、寛一本、長門本、屋代本などがあり、語り本と読本をべつべつに数えると高木市之助先生の調べでは、その異本の種類は百以上にものぼっています。これらすべては日本の図書館にはありませんが、私どものドイツには印刷されたものが僅かにあるだけです。

また、次のようなことも思い出してください。日本の文学関係の学部には殆ど全ての学部から紀要が出版されています。日本の図書館にはこれらはすべてそろっています。ドイツにはそのうちのほ

んの一握りしかありません。

さらには次のこともあります。日本全国で六百の句誌が出版されています。大阪だけでも、藍、網代、岩戸、伎芸天、はながたみ、寄生木、淀など、三十以上あり、すべてが文学研究者の資料になります。日本ではこのような雑誌はすべて揃っていますが、私共の国にはほんの少ししかないなど……。

このように、ちょっと申し上げただけでも、なぜ、私たち日本学研究者が、時々「空遠く離れた国」、ほかならぬ「天離る鄙」に住んでいる人間のように感じるのかよくお解りいただけると思います。

では、ドイツ人日本学研究者は、このような状況の中でどうすべきなのでしょう。もっとも簡単な解決法があります。日本学研究の「都」、日本に引越してしまふことです。そして国立国会図書館、あるいは国文学研究資料館のとなりにアパートを借りて、さまざまな愛書家向の本の宝の山に囲まれて……（ということですがだれにでもできることではありません）。

本日の話では、私が研究者として歩んだ道や研究内容についても述べるようにとの仰せでございました。それで、ここで、この天離る鄙における、私自身の旅の一里塚について、時々はまじめさを抜きにしつつ、またエピソードを交えながら、短くお話ししてみようと思います。

私が博士論文に取り掛かろうとおもって論文のテーマを探しはじめましたのは一九六四年のことでした。その当時、私には

二人の師があり、一人は、オスカー・ベンル（池田亀鑑、久松潜一両教授に師事した学者でした）で、歌論と平安文学が専門で、源氏物語のドイツ語訳者でした。もう一人はギュンター・ウェンク（亀井孝教授の友人でした）で、当時万葉仮名の音声学的研究を専門とし、著書に『日本語音声学史』四巻がありました。この二人の業績の大きさは、まさに圧倒的で、化け物のごとくにさえ思われたものでした。で、私が決めたことは、「平安時代と奈良時代だけはやらない、できたら中心的文学作品をさける、音声学もできるかぎり避ける」という方針でした。文献目録など調べますと、平安時代文学や万葉集については日本の図書館にはキロメートル単位で書架を埋めつくしている文献があるのにたいし、私たちの「天離る鄙」にはテキストもすくなくなければ、研究書も少ししかないということがわかり、私の決意はますます堅いものになりました。

そういう訳で、「中世」に降下した私でした。が、ここでも能のような高級文学ではなく幸若舞曲という、中心からは非常に遠くはずれた周辺に位置づけられる、語り物のジャンルでした。この分野では、都の日本と鄙のハンブルクの差は、「空遠く離れて」というほどのものではありませんでした。というのは、このジャンルは日本でもまだ殆ど手がつけられていない分野だったのです。笹野堅先生編のテキスト（『幸若舞曲集』）と一、二の研究論文があるだけでした。

初めて日本の土を踏んだのは一九七〇年で、博士論文完成後三年後のことでした。私の専門を聞かれて、「幸若舞」と答えたあと、いつも、それが何なのか説明しなければなりませんでした。「幸い

の幸に若者の若」というように言いつつ、掌に漢字を書いてみせたものです。日本で幸若ブームが始まったのは、私の博士論文より十年後のことでした。(当然のことですが、私の論文とブームとは全く関係がございません。)

私にとりましては、この幸若論文での経験は貴重なものであり、その後も研究指針となるものでした。私が発見したのは、これは勿論誇張した言い方ではありませんが、「周辺を、選択の試金石ないしは原理」とするということ、それに、「日本学における生態学的地位」(つまり日本学の中の生態学的場所)を探すことが、「天離る鄙」の自己主張と権利が認められるには大変重要であるということでした。

このような訳で、博士論文の後、私の研究の関心は、近代以前の文学では、市古貞次教授の有名な著書(『中世小説の研究』)の外、あまり研究されていなかった御伽草子にむかい、近現代文学の分野でも、政治詩歌というこれまた周辺の、なおざりにされてきたジャンルをとりあげ、ここから今度は中世のなぞなぞと小歌に進みました。と、申し上げても、もう皆様驚かれはしないだろうと思います。むろん、小歌も、あの人口に膾炙しております『閑吟集』ではなく、私は、研究の進んでいなかった『宗安小歌集』に注目しました。

また、十年ほど前から「職人歌合」というテーマに取り組んでおりますが、これは日本文学の中心的存在ではありませんし、宗祇や宗長や心敬を輩出しました室町という時代の文芸として、最も重要な作品という訳でもありません。

十年ほど前に東京の国文学研究資料館に招かれたことがありまし

た。客員教授は共同研究のテーマを提案することになっておりまして、私がこの周縁のと申しましょるか、高級文学には入らない「職人歌合」をとりあげたいと申し上げると、皆さん呆れたような、また驚き入ったような顔をなさったのを、今でもよく覚えております。

皆様、「天離る鄙」における日本学研究に残されている可能性の一つをご紹介しようと思つて、私のエピソードを披露しながら、個人的なお話しをここまで申し上げてまいりました。

ただ、この「周縁主義(周縁の原則)」というのは、それだけで十分、というものではありませんし、私の場合も百パーセントこれで満足した訳ではありません。そうではなくて、鄙にある者のもつ可能性、むしろ、主流、つまりメインストリームからずっと離れた鄙に住む者こそが持つ可能性、と私は申し上げたいのですが、その二つ目の可能性で補うべきだと考えております。

学問の国際化といわれて久しくなりますが、いまでもある種の、歴史的に受け継がれてきました、独特の対象への接近の仕方というものがありますし、さらには、それぞれの文化圏ないしは、しばしば、国々の間でさえも、違った独特の問題提起のあり方というものがあるだろうと思われまます。一例を挙げますと、日本の文学者の方が「国学」を伝統あるいは学問の歴史の一部と考えるおられるように、ヨーロッパの人文科学の研究者はヨーロッパの解釈学の伝統に立っております。つまり、文化や精神を対象とする人文科学の分野では、それぞれの国で「同じこと」をやっている訳ではないこと、「同じこと」をやっているように見えても、生まれてくるものは何

か違ったものであるということになります。

私自身の研究を例にとって申し上げますと、幸若舞曲の研究では、日本でもよくなされるように、そして私も大変重要なことだと思っ  
ていることですが、幸若の「大頭本」に当たって、ほぼ千二百例の、  
時制と完了アスペクトの助動詞（キとケリ、ツとヌ、タリと  
リ）の対立を挙げ、記述いたしました。しかし、そこで問題にし  
ましたのは、中世後期の日本語に、もしかしたら日本語そのものに、  
よく言われておりますような「文法上の時制（ケリによる過去）イ  
コール（実在の）過去」という公式が当てはまるのだろうかという  
ことでした。

幸若舞曲の文学的取り組みにおける私のテーゼは、およそ「語る」  
という行動というものは時間の軸に沿って進行するはずだというこ  
と、そして「語りの時間」と「語られた時間」の違いは時間の縮約  
（縮み）と伸張（伸び）といういわば物的な差異にあるということ  
でした。そこで、私の関心は、それぞれの曲の、時間的組み立て方  
の問題、特に、どの程度に、そしてどの場所で語り手が（物語の筋  
の上の効果からだけでなく）純粹に時間的な構成の為に（夢や祈り  
などの）「時間的な予言」を利用しているかという問題にありまし  
た。

政治詩歌でも短歌に反映している政治的現実というより、いわゆ  
る「目的意識のある詩歌（文学）」に一般的な性格や特徴を問題に  
いたしました。例をあげますと、皆様ちょっと奇異に思われるかも  
しませんが、中世の仏教詩歌、例えば親鸞上人の和讃や、渡辺順  
三の政治短歌や平和運動における短歌などにも共通するものが見ら

れます。

今現在の研究対象は、職人歌合であります。ここでも、岩崎佳  
枝氏、または網野善彦氏のような日本人研究者の挙げてこられた、  
すばらしい成果をコピーするのではなく、私が一九八七年に提案し  
ました、「文学受容形式としてのパロディ」というモデルにしたがっ  
て研究を進めて参りました。

皆様、ここに例として挙げました私の個人的な経験を、先に申し  
上げた外国の日本学研究がおかれた客観的な条件と結び付けてみま  
すとき、可能性について次のような第一の結論に達します。

天離る鄙の本質的性格に起因する客観的な難しさも確かに存在し  
ます。存在はしますけれども、研究対象を意識的に選び、その領域  
を限れば、そして、それぞれの学問的伝統の中から生まれ、隣接科  
学で試された問題提起と対象への取り組み方を利用すれば、そこに  
外国における日本学にも意義のある可能性が見いだせるということ  
であります。

ただ、私が考えますに、それでもまだ十分とは申せません。そこ  
で、この話の最後の部分では、日本学研究にいま必要とされている  
こと、希望、将来への展望といったことに触れてみようと思えます。

学問は国際化を必要としておりますし、また対話も必要でありま  
す。この二つを通して「天離る鄙」における難しさを和らげること  
ができます。そして、私にはその条件はすでにできあがっているよ  
うにみえるのです。そして、状況は、ちょっとおおげさな言い方を  
しますと、日に日に、刻一刻とよくなっているように思えます。国

際化と対話の柱の一つは専門家、ならびに組織同士の協力と学術交流にあります。

ここでこの場をお借りして断言させていただきたいことがございます。ハンブルク大学の日本学が有り難いと常日頃感じているのは、大阪市立大学との姉妹校関係と私共の学生を受け入れていただいていることについてではありません。ハンブルクの日本学は、学問研究活動において、貴大学との交流と対話から大きな恩恵を受けている、そのことに対して、深い感謝の念をいただいているのです。決して、外交辞令として、こう申し上げるものではありません。具体的に申し上げますと、マルクス・リュッターマンの「菅の浦」についての博士論文は、河音能平教授のご指導を得て初めてあのように立派に仕上がりましたし、フォルマー博士の就職論文 (Habilitation) も、阪口弘之教授の支えがあってこそ、あの成果につながったと思われるのです。私自身も七十一番職人歌合の「シーボルト本」刊行につきましては、大阪市立大学、とりわけ阪口弘之教授との協力から大きな恩恵を受けております。

皆様、私は二分程前に協力 (コオペレーション) と必要な対話 (ダイアログ) のための条件は日に日に、刻一刻とよくなっているとお申しました。この考えを、ちょうどいま、この場所、この情報センターにおきましてもう一度とりあげ、具体化してみたいと思います。新技術、つまり、Eメール、メイリングリスト、ニュースグループ、そしてインターネットは、いま学問の距離を縮め、対話を容易にし、新しい可能性を生み出しております。

「天離る鄙」にある日本学にとりましては、いろいろの日本の近代以前の文学のテキストを、すでにもうインターネットに見ることができると時代を意味しております。まだまだ数の上からは少数に過ぎませんが、アクセス上の制限もございません。ですから、日本の文学界ならびに図書館にお願いしたいことは、より多くのテキスト、より多くのエディション、それに異本を、世界中の日本学者のためにもネットにのせていただきたいということです。これに勝る世界の日本学への貢献はないように思われます。(わたしたち研究者が貴重図書を損傷しないか心配して来られた図書館員、資料館員の方々にとっては、書庫からテキストをとりだす手間が省けることになります。また経済的でもあります。)

それほど遠い将来の話ではなく、いま、すでに可能なことだけでも、対話と協力関係の改善のチャンスはたくさんあります。一つの具体的な例を申し上げますと、この冬学期、私の上級生向けの演習で「日本文学における辞世と遺偈」というのがあります。このゼミは「セミバーチャル」でやっております。私が資料、例えば豊臣秀吉とか黒田如水の辞世のファクシミリ版をインターネットに載せます。学生はこれをインターネット上で読んで、翻訳の試案 (試みの案) を作ります。同様に、「現実の」ゼミの結果 (授業記録、翻訳) もインターネットに入れます。毎週の演習と演習の間には、大先輩を利用して、Eメールや、独自に設けましたニュースグループ「辞世」をつうじて、コミュニケーションをとりあっています。全ての資料と成果は、日本学研究室のホームページを開けば、どのインターネットの端末からでも見ることができます。私たちの

「辞世ゼミ」のホームページは、学外の専門家の方や、日本学者の方からも、翻訳案、コメント、指摘などをいただけるように、そのように意図して構築してあります。もちろん日本からも御提案や御指摘などがいただけることを期待しております。私がここで、この日本一の大学情報センターで、このように申しあげるのは理由のないことではございません。

卑見によりますれば、学術協力の核をなすのは、たとえば、大阪市立大学とハンブルク大学のような、円滑に機能し、十分に信頼できる大学間協定であります。皆様もご存じのとおり橋本総理大臣とコール首相も、先頃日独学術交流について取り決めを作りましたが、その十三条では、既存の協定を助成すると明言いたしました。

ここに、一つのアピールを申し上げてお話の締めくくりとしたいと思います。最新の技術上の可能性も利用して、交流と対話を深めようではありませんか。そうすれば、あるいは「天離る鄙」もいくらかは「都」日本に近づくかもしれません。

皆様、もし、私の話がなぐり過ぎ、皆様を退屈させてしまったとすれば、それこそ、「天離る鄙」からの訪問者ということに免じて、御容赦をおねがいいたします。はじめに申し上げました万葉集の和歌はつぎの一首でございました。

天離る 鄙に五年 住まひつつ 都の手振り 忘れえにけり  
ご清聴ありがとうございました。



Universität - Fachbereiche und wiss. Einrichtungen - Seminar für Sprache und Kultur Japans

Hauptseminar Roland Schneider WS 97/98

Literatur als Abschied vom Leben: *jisei*, *yuige* und *isho* im vormodernen und modernen Japan

Willkommen auf der Homepage des (semi-)virtuellen *jisei*-Seminars. Es handelt sich hierbei um den Versuch der Seminarbeteiligten, Internetanwendungen (WWW, Email, Newsgroups) in die Seminararbeit zu integrieren um Materialien über das Internet auszutauschen, Ergebnisse zu publizieren und auch um vom Sachverstand von Japanolog/inn/en außerhalb Hamburgs profitieren zu können. Hierzu wird in nächster Zeit eine technische Möglichkeit geschaffen, die es erlaubt, Übersetzungsvorschläge oder Anmerkungen direkt via Internet zu publizieren.



[LV-Kommentar](#)

[Faksimile-Material](#)

[Sitzungsplan](#)

[haiku-Material \(englisch\)](#)

[Sitzungsprotokolle](#)

[Referatliste](#)

[Referatabstracts](#)

Neu: [Ihre Kommentare und Übersetzungsvorschläge](#)

[Übersetzungen](#)

[Die \*jisei\*-Newsgroup](#)

[Email-Adressen der Teilnehmer/innen](#)

(注) 本稿は、平成九年十一月二十六日に行われた大阪市立大学名誉学位贈呈式に於けるローラント・シュナイダー教授の記念講演をそのまま掲載したものです。

Der Geschäftsführende Direktor des Seminars für Sprache und Kultur Japans, 24. November 1997. [Impressum](#).